The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜Book Review＞YI, Christina, Colonizing Language: Cultural Production and Language Politics in Modern Japan and Korea
Author(s)	コマストリ，キアラ
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2019, 2, p. 31-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【書評】

YI, Christina, *Colonizing Language: Cultural Production and Language Politics in Modern Japan and Korea*[*]

（クリスティーナ・イ『植民地化する言語：近代の日本と朝鮮における文化生産と言語政治』）

キアラ・コマストリ

本書は，北米の気鋭の日本文学研究者である Christina Yi が，1930 年代から 1950 年代にかけての日本と朝鮮を視野におさめつつ，帝国日本の支配下では一体でありつつもその脱植民地化の過程で二つ（あるいは三つ）に切り分けられていったこの地域における「文化生産と言語政治」を論じた，重要な著作である。本書において問題とされているのは，日本の朝鮮に対する皇民化政策において「国語イデオロギー」がはらんだ言語的ジレンマであり，しかもこの言語政治的なディスコースが 1945 年以降も解決されないまま在日コリアンのうちに持続していったさまである。日本文学研究者である著者は，「日本文学」というカテゴリーに注目し，このカテゴリー自体が構築されていった歴史的および政治的プロセスを解明していく。植民地支配の歴史を踏まえたうえで，自明なものとみなされがちな「日本文学」をいかに捉えなおすか。はたして「在日文学」は，「日本語文学」として括ればいいのか，あるいは，「非日本人による日本文学」なのか。「どのラベルが妥当であるかを問うよりも，ラベル自体を問題視する必要があるのではないか」（152 頁）というのが，著者の立場である。

ここでは本書のタイトルを「植民地化する言語」と訳してみたが，原語のはらむ二重性（ある言語を植民地化するという含意と，ある言語が植民地化されるという含意との二重性）が十分に反映された日本語訳になっているかどうか，心許ない。この点については，あらかじめ読者の注意を促しておきたい。

全 6 章からなる本書は，2018 年に，Columbia University Press から刊行された。以下では，同書を日本の読者につなぐことを意図して，あえて日本語で紹介する。

第 1 章 National Language Ideology in the Age of Empire は，満州事変後に日本の傀儡国家「満州国」が成立したのにともなって朝鮮半島における帝国日本の文化政策が急転回した

[*] YI, Christina (2018) *Colonizing Language: Cultural Production and Language Politics in Modern Japan and Korea*. New York: Columbia University Press.

事実に注目する。日本の植民地支配政策がたんなる「同化」（assimilation）から「皇民化」（imperialization）へと転回していくにつれて，政府が推進していた国語イデオロギーも展開していった。そのプロセスを論じるにあたって取り上げられているのは，朝鮮人作家の張赫宙（1905-1997）と金聖珉（1915-1969）の事例である。

張赫宙は，1932 年 4 月に総合雑誌『改造』の懸賞小説に入選した「餓鬼道」が，金聖珉は，1936 年 8 月週刊誌『サンデー毎日』に発表された「半島の芸術家たち」が，当時の文壇で注目された。発表された当初は両作とも朝鮮人作家によって「日本語」で書かれたものとして認識されたが，1937 年以降，皇民化政策が強化されていくなかで，それまでははっきりと区別されていた「日本語・外地」と「国語・内地」の間の境界線が定かではなくなっていく。著者はこれを「ディスコース・シフト」と呼び，「半島の芸術家たち」の映画版『半島の春』（1941 年，イ・ビョンイル監督）において確認できるとする。

「内鮮一体」の理念によって建前のうえでは「外地」と「内地」の間に存在した様々な差別が解消されたが，登場人物の一人（朝鮮人）が悲しげな表情で沈黙を守ったままフェイドアウトするこの映画のラストシーンは，「国語イデオロギーが，彼ら（被植民者―引用者注）の多様な異なる声を包摂するよりもむしろ，多様性の観念自体を放逐してしまい，皮肉にも沈黙によってしか自らの帰属をめぐる別のヴィジョンを表現できなくした」（23 頁）ことを示唆している，と著者は指摘する。

第 2 章“Let Me In!”: Imperialization in Metropolitan Japan は，1938 年以降，東京の作家や編集者，出版者等が皇民化の波に乗って「朝鮮」を商品化し，情報に飢えていた本土の読者に提供したプロセスが論じられている。また，金史良（1914－1950）の「天馬」（『文藝春秋』1940 年 6 月号）という作品の分析を通して，皇民化政策がはらんでいた矛盾が提示されている。

1938 年以降，「内鮮一体」というスローガンがメディアによって広く宣伝されるなかで，陸軍特別志願兵制度も創設され，朝鮮人日本兵の採用が始まっていった。日本本土では，朝鮮半島に対する関心が高まっていたが，そこにすぐさまビジネスチャンスを見出したのが小説家兼実業家の菊池寛（1888-1948）であった。菊池は，皇民化政策が本格化される前から雑誌『文芸春秋』や『モダン日本』において，「日本文学」の純粋な性格，その普遍性と非政治性を強調し，日本文学こそ地理的・民族的な距離を埋めることができると述べていた。1930 年代後半，菊池は，朝鮮や台湾への「日本文学」の普及を積極的に図るとともに，『モダン日本』の一環として「朝鮮芸術賞」を設立するなど，本土で活躍していた朝鮮作家を応援した。

しかし，「内鮮一体」の理念によって「外地」と「内地」の境界線が曖昧になり，日本語が「国語」化された時，本来は「朝鮮人作家」という肩書も無くなるはずだが，実際には，むしろ「朝鮮」というものを他者化（othering），商品化（commodification）することによって本土・東京（metropole）と周縁（periphery）とのヒエラルキー，力関係がつねに再認識

され，維持されていった，というのが，著者の主張である。こういった矛盾は，金史良の「天馬」において確認できる。この作品は，まさに植民地末期の文壇における日本人文学者と朝鮮人文学者の関係，つまり支配／被支配，作用／反作用の相互関係を，言語をめぐる葛藤の物語として提示している。主人公玄竜は朝鮮人でありながらも，完全なる内地人化を望む親日派の文人である。しかしそのことは，最初から実現不可能であることを玄竜も承知している。著者は，玄竜のその深い絶望の表象として彼の不貞不貞しく気味悪い「笑い」に注目する。それは，「日本と朝鮮をつなごうとする一つの言語行為でありながら，……しかし同時に，言語の喪失，伝達不可能性を表し，……同時に存在する二つの植民地的アイデンティティの調和の不可能性を意味する」（41 頁）と述べる。

第 3 章 Envisioning a Literature of the Imperial Nation では，1940 年の新体制運動のなかで，朝鮮人作家たちによって「国語」（=日本語）で生産されていた「朝鮮文学」が，「国民文学」というカテゴリーに包含されていく過程が明らかにされるとともに，植民地末期の文壇の状況にも触れられている。著者がここで取り上げるのは，李光洙（1892-1950）の「三京印象記」（『文学界』1943 年 1 月号），小尾十三（1908-1979）の「登攀」（『国民文学』1944 年 2 月号），李貞來（生没年未詳）の「愛国子供隊」（『文芸』1942 年 1 月号）という三つの作品である。彼ら/彼女らは，それぞれ年齢，性別，民族，階級，そして活動場所が異なるが，共通しているのは，三人とも東京（metropole）で読まれおり，三人とも東京へ向けて周縁（periphery）から発信しているということである。

1940 年から敗戦直前まで，文芸雑誌『新潮』や『文芸』や『文学界』などにおいて，「国民文学」をめぐる議論が活発に行われた。「国民文学」とは何か。そして，「国民文学」における「国語」（=日本語）の役割とは何か。詩人神保光太郎（1905-1990）によれば，「国民文学」は，日本国の代表性は持ち，西欧文学の握る支配権を奪い返し英語をも排撃する力を有するがゆえに，「大東亜共栄圏」において一つのモデル一として機能し得るという。つまり，「国民文学」を掲げていた知識人らは，英語やドイツ語等に代えて国語を普及させ新しい世界語とし，「国民文学」を新しい世界文学と位置づけようとしたといえる。

このような見解に対して，日本語で作品を発表した朝鮮の文学者は複雑な心境であったが，朝鮮版『国民文学』の主幹を務めた崔戴瑞（1908-1964）や小説家李孝石（1907-1942）のように，日本語で書くことを，「朝鮮文学」を「大東亜」に流通させ世界のステージに立つための手段と捉えていた人も少なくなかった。

しかし，李光洙，小尾十三，李貞來の三つの作品の分析から著者が明らかにしているのは，朝鮮の作家も台湾の作家も，名目上「日本人」への仲間入りが果たせたとしても，実際には彼らは本土・東京（metropole）の「日本人」によって常に「外地人」として認識され，結局「植民者」と「被植民者」との間には埋めることのできない溝があった，という事実である。

第 4 章 Coming to Terms with the Terms of the Past は，敗戦直後に連合軍占領下の日本にお

いて，一瞬にして「過去」となった植民地の記憶という歴史の「巨大な頁」をそれぞれの場所でそれぞれの立場から「音なくめく」 らなざるを得なかった人々について論じられている。

「歴史はその巨大な頁を音なくめくったのであった」というくだりは，宮本百合子（1899-1951）の「播州平野」（『新日本文学』創刊号 1946 年 3 月）による。1940 年代前半の『国民文学』の意図が，人々の意識を「市民」から「国民」へと誘導することにあったとすれば，『新日本文学』の目指していたところは，まさに逆のプロセスであった。

「播州平野」の主人公ひろ子は，疎開先であった東北の小都市から夫の実家がある山口県へ向かう電車のなかで，しばしば朝鮮人を目撃する。抑圧から解放され，朝鮮語で歌を歌いながら「故郷の朝鮮へ引あげてゆく」彼ら/彼女らは，ひろ子の目にはまぶしく映り，軍国主義からの解放を共にする同伴者にさえ思える。しかし，著者が鋭く指摘するように，ひろ子が彼らに対して親近感を抱くためには，まず彼らを「朝鮮人」として他者化（othering）する必要があり，「そのような民族的な他者化を通じてしか，彼らと日本人との間に（民主主義革命をめざす）精神的な連帯は築き得ない」（81 頁）と述べる。そして，このような差異（differentiation）のプロセスは，「内鮮一体」のディスコースと一見真逆に見えても，実際には根本的な部分で共通しているという。

1947 年 5 月，明治憲法下最後の勅令として外国人登録令が施行され，当時，植民地朝鮮の出身者は日本国籍を持ちながらも外国人とみなされることになり，1952 年に日本が主権を回復すると，在日朝鮮人は日本国籍を剥奪され，完全に「外国人」となった。しかし，そういったなかで，第 1 章に登場した張赫宙のように，日本への「帰化」を選ぶ朝鮮人もいた。植民地時代にいわゆる「親日作家」として活躍していた張は，自伝的短編小説「脅迫」（『新潮』1953 年 3 月号）において，「民族」と「国家」と「言語」をめぐる自分自身の葛藤を詳しく語る。確固とした「母国語」と「母国」を持たない「日本語と朝鮮語の両方共下手な」張は，まさに植民地時代の国語イデオロギーがもたらした言語ジレンマのあらわれであると著者は指摘する。最後に，元々北海道生まれで，1941 年まで日本占領下にあった樺太で教師を務めた譲原昌子（1911-1949）の「朝鮮ヤキ」（『新日本文学』1949 年 4 月号）の分析がある。日本が戦争に敗れて「戦後」になった今，植民者/支配者側に立っていた譲原にとって，過去と折り合いをつけることは難しい。

第 5 章 Colonial Legacies and the Divided “I” in Occupation-Period Japan は，第 4 章においてすでに触れられている在日コリアン（*zainichi* Koreans）が誕生した背景と要因をさらに深く掘り下げていく。また，在日コリアン作家金達寿（1919-1997）の「塵芥（ごみ）」の分析を通して，「民族」と「言語」の観点から「在日文学」がはらむ葛藤と可能性について述べられている。

いわゆる「在日文学」は，祖国朝鮮の植民地支配からの解放と同時に，その祖国がイデオロギー対立によって分断されるという，きわめて特殊なポストコロニアル状況のなかで

生まれた。特に，張赫宙の事例で見てきたように，在日コリアン作家にとって日本語で書くということはどうい意味をもつのか。作者と言葉の間に存在する矛盾や葛藤にどう対処し乗り越えるか，という問題が，戦後早い時期から在日コリアン知識人の間で議論されていた。その際に，重要なプラットフォームとして機能したのが，日本語雑誌『民主朝鮮』（1946 年～1950 年）である。創刊直後の『民主朝鮮』は，金達寿を中心として，日本人の朝鮮/朝鮮人に対する認識を正すために，日本語を用いて日本人に向かって発信するメディアとして設けられた。また，在日朝鮮人同士の重要な交流の場にもなったが，著者も指摘するように，ごく最近まで支配者/迫害者であった日本の言葉でしか，支配下にあった祖国朝鮮について語り得ないという事実，その皮肉と矛盾は，彼らにとって乗り越えがたい壁であった。ここでは，金達寿の「塵芥（ごみ）」の 1942 年の初出版（『文芸首都』1942 年 3 月号に金光淳という筆名で発表）と 1947 年版（加筆・修正のうえ『民主朝鮮』1947 年 2 月号に金達寿名義で発表，その続編が「塵芥船後記」）との比較を通じて，皇民化時代と戦後との連続性と不連続性（continuities and discontinuities ）が解明されている。

第 6 章 Collaboration, Wartime Responsibility, and Colonial Memory は，「協力」と「戦争責任」をめぐる二つのディスコースが，それぞれ太平洋戦争終戦後の日本と朝鮮においてどのような展開を見せたかを論じる。1948 年 8 月の大韓民国政府樹立後，反民族行為処罰法が制定されたが，それ以前からも旧植民地朝鮮と在日コリアン社会の中ではいわゆる「親日派狩り」が行われていた。一方，連合国占領下の日本では，「戦争責任」をめぐる議論が活発に行われていたが，それは，皇民化政策に対する日本の責任よりも，むしろ日本が連合軍や中国に対して起こした侵略戦争が中心になった。要するに，旧植民地朝鮮において行われた「協力者」の追及・処罰と，日本での「戦争責任」の追及・処罰とは，別々のディスコースとして成立していたことがわかる。

文学の世界では，日本の植民地統治に協力したとされた李光洙は，強烈に非難された作家の一人である。この問題について李光洙は，「私の告白」（1948 年）において，いずれ朝鮮民族の役に立つという目的をもって実力育成のために「日本人に生まれ変わ」ろうとしたと自己弁明をするが，作家金石範（1925-）の指摘するように，「朝鮮民族のため」と「日本人に生まれ変わる」という二つの立場は両立しない（123 頁）。

著者が指摘するところによれば，「皇民化時代において「日本人になる」（becoming Japanese）ということは，何よりも先に「皇民になる」（becoming an imperial subject）ということだったため」，朝鮮民族であろうが，日本人になることができた（124 頁）。実際に，朝鮮でも日本でも，民族アイデンティティが強く意識されるようになるのは 1945 年以降で，「協力」と「戦争責任」の問題が問われるようになるのも，そのような戦後の枠組においてである。最後に，田中英光（1913-1949）『酔いどれ船』（1949 年）の分析を通して，デカダンスとジェンダーと民族の問題が論じられている。

エピローグは，志賀直哉（1883-1971）の「国語問題」（『改造』1946 年 4 月号），李恢成（1935-）

の「証人のいない光景」(『文学界』1970 年 5 月号)，森崎和江（1927-）の「二つのことば・二つのこころ：ある植民二世の戦後」(1970 年）という三つの作品を取り上げて，植民地経験の観点から「言語切り替え」（language switching）の問題に触れてる。著者は，植民者側の森崎にしても，被植民者側の李にしても，「帝国支配の文脈を忘れることのできなかった者（あるいは忘れることを許されなかった者）にとって，言語を〈切り替える〉ことは，決して無意識で何気ない行動ではなかった」（148 頁）と結ぶ。

以上，本書の構成と内容を紹介してきた。次に，私の限られた知見の範囲からではあるが，本書の重要な学術貢献を 3 点に整理して述べておきたい。

第一点目は，対象となる時間枠を 1930 年代から 1950 年代までの時期に設定していることである。これまでの先行研究では，1945 年以前か以後かのどちらかに重点を置いたものがほとんどであったのではないだろうか。本書は，方法的に貫戦的なアプローチを選択して，「戦前」と「戦後」の間に存在する様々な連続性と非連続性を説得力をもって提示している。第二点目は，参照されている一次資料の豊富さと，その英訳の正確さである。著者は，数多くの日本語と朝鮮語のテクストを参照し，きめて精度の高い翻訳を提供している。第三点目は，分析枠組の学際性である。上述した通り，著者は日本文学研究者であり，したがって本書においても文学作品の分析が大きな比重を占めていることは当然である。とはいうものの著者は，文学テクストにとどまらず，映画を初めとする多様な一次資料を用いて，きわめて深く広がりのある議論を展開している。それゆえ，本書は，文学研究者だけではなく，歴史や思想，社会や文化などの研究者にも幅広く参照される一冊になると考えられる。

評者は，在日文学を専門としているわけではなく，また，朝鮮文学についての知識も乏しい。そのため，この書評も，紹介に近いものにならざるをえない。立ち入った批評をすることは評者には難しいので，最後に，日本研究のあり方という問題と関わって，概括的なコメントを記しておきたい。

北米で東アジアを研究する場合，主な研究対象とする地域の言語のほかに，もう一つ東アジアの言語を学ぶことは，当然の前提であるといえよう。日本の日本研究者の場合，日本語以外の東アジアの言語に通じていないのが普通であるのに対して，北米の日本研究者の場合は，本書の著者が日本語に加えて朝鮮語にも通じているように，人によってレベルの違いはあるにせよ，日本語以外の東アジアの言語を学んだ経験を必ず持っている。

本書の場合，その可能性が十分に追究されていて，日本列島と朝鮮半島を視野に収めつつ帝国経験と脱植民地化の経験を貫戦史的に問う試みがなされている。この試みは，比較帝国史的な観点からの他の事例との比較研究にもさまざまなかたちで接続されうるであろう。このような視野の広さと研究上のポテンシャルの高さは，日本の日本研究が学ぶべき事柄ではないだろうか。今後本書をめぐって著者と日本の学界との生産的なやりとりが交わされるきっかけとなることを願って，本書評は日本語で記した。